

## カウンセリングを学んだ教師の意識について

学校教育専攻  
臨床心理士養成コース  
広瀬 毅

指導教員 小坂浩嗣

### 1. 問題と目的

教師がカウンセラー化することは、似て非なる教師・カウンセラー二つの立場に立つことになり、問題に直面したとき悩んでしまうデメリットがある。しかし、日頃から児童生徒に関わっている教師が、カウンセラーの姿勢やスキルを発揮できるメリットは教育現場に必要である。

そこで、本研究では、カウンセリングを学んだ教師が、現場で何を感じているのかを知り、デメリットについては、その傾向と対策を探ることを目的とする。

### 2. 方法と対象

#### (1) 方法

##### 1) 質問紙調査の方法

主な内容は朝井(2003)の〈児童生徒との人間関係〉〈教職員との人間関係〉〈保護者との人間関係〉を参考にした。これに、〈カウンセリングを学んだ者として〉を加え、カウンセリングを学ぶ前後の気持ちの動きを五段階で評定してもらうものである。また、自由記述として三つの設問を用意した。調査方法は質問紙と返信用封筒を同封し、郵送法により実施した。

##### 2) インタビュー調査の方法

対象者には2007年12月にインタビュー調査の依頼状と調査概要を同封して郵送により依頼した。対象者と調整した結果、計五回の継続インタビューを実施した。調査場所は対

象者の勤務校の一室を借りた。一回あたりの面接時間は一時間とした。各面接回のインタビュー・テーマを設定し、半構造化した。

#### (2) 対象

##### 1) 質問紙調査の対象

対象は、1994年4月から2008年3月まで鳴門教育大学大学院生徒指導・教育臨床コースに在籍していた現職教員212名であった。調査期間は発送が2008年6月9日、返信締切を2008年7月9日とした。

回答のあった114名のうち、記入漏れなどの回答に不備があった者は除外し、最終的に110名を有効回答者として分析の対象とした。

##### 2) インタビュー調査の対象

対象者は、鳴門教育大学大学院教育臨床コースを修了した小学校勤務の現職教員1名(男性)であった。

### 3. 結果

#### (1) 質問紙調査の結果

##### 1) 対象者の属性

校種では、小学校教員が49名で一番多かった。性別では小学校の女性教員が27名で一番多かった。一番少なかったのは、特別支援学校の男性教員で1名だった。

勤務年数では、勤務年数11~20年の小学校教員、21~30年の中学校教員が23名で、多かった。修了年数では、大学院修了後1~5年の小学校教員が30名で最も多かった。

## 2) 記述統計

殆どの項目が最大値 5 (随分変化した), 最小値 1 (まったく変化しない) であった。

カウンセリングを学んだメリットの校種別回答集計では, 「スクールカウンセラーについての理解が深まった」「外部機関との連携の大切さがわかった」の回答数が多かった。

カウンセリングを学んだデメリットの校種別回答集計では, 「児童生徒の一人ひとりにゆっくり関われない」の回答数が多かった。

## 3) 男女間比較

全質問項目につき男女差を検定する t 検定を実施した結果, 有意差は認められなかった。

## 4) 校種間比較

全質問項目について校種差を検定する一要因分散分析を実施した結果, 「児童生徒を励ますよう努めている」に有意差が認められた ( $F(4/105) = 2.54, p < .05$ )。次に多重比較 (Tukey 法) を実施した結果, その他が小学校より有意に高い得点であった。

## 5) 勤務年数間比較

全質問項目について勤務年数を検定する一要因分散分析を実施した結果, 「保護者に自分の指導方針や指導内容を的確に伝えようと心がけている」に有意差が認められた ( $F(3/106) = 4.12, p < .05$ )。次に多重比較 (Tukey 法) を実施した結果, 31 年以上が 11~20 年, 21 年~30 年より有意に高い得点であった。また, 「保護者からの要望や批判には丁寧に対応しようとしている」でも有意差が認められた ( $F(3/106) = 2.83, p < .05$ )。31 年以上が 11~20 年より有意に高い得点であった。

## 6) 修了年数間比較

全質問項目について修了年数を検定する一

要因分散分析を実施した結果, 有意差は認められなかった。

## 7) 自由記述

「聞く技術や関わり方のポイントなど, 児童生徒への対応が変わった」という意見が多かった。一方, 「多忙さゆえに分かっていても出来ないことがもどかしい」「同僚間で分かり合えないのがつらい」等の意見が多かった。

また, 教育現場では発達障害への対応が急務のこととなりつつあるようだ。

## (2) インタビュー調査の結果

カウンセリングを学び, 自他を客観的に見えるようになり, 心の安定を手に入れた。教育現場では, 己の才を誇らず謙虚であること, カウンセラーではなく教師であることを肝に銘じ, 組織として結果を出すように努めている。役割分担が大事である。

カウンセリング・マインドが活かせる場面では, 相手の出方を見て, 相手に寄り添った言動を心掛けている。評価的な対応はしない。

## 4. 全体考察

教師が本職であるからには, 心も授業も大事である。教材研究を疎かにしてはいけない。

調整者としての役割を果たす一方, カウンセリングの知識と技術を教育現場にいかに還元していくか, その方法から体制作りに至るまで, 考えなければならないことは多い。

## 5. 今後の課題

インタビュー調査が 1 名というのは少なすぎた。また, 質問紙の五段階評定は自由度を持たせたのがかえって答えにくかったようだ。

カウンセリングを学んだメリット・デメリットが沢山浮き彫りとなり, いくつか改善策も検討できたので, 実際に模擬授業などして検証することが出来れば, なお良かった。